

永遠の神であるイエス・キリスト

ヨハネ福音書1:1-5

【新改訳2017】

- 1:1 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。
- 1:2 この方は、初めに神とともにおられた。
- 1:3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。
- 1:4 この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。
- 1:5 光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。

(1:1) ギリシャ語・英語／行間訳

Ἐν ἀρχῇ ἦν ὁ λόγος, καὶ ὁ λόγος ἦν πρὸς τὸν θεόν, καὶ θεὸς ἦν ὁ λόγος.
 in (the)beginning was the Word, and the Word was with (the) God, and God was the Word.

【祈りながら考えよう】

- (1)ごく普通に言うと言葉とは何でしょうか。言葉にはどんな目的や機能がありますか。
- (2)ものみの塔の異端では、キリストは人となる前に御使いだった主張しています。1章1-3節から、その主張が間違いであることを説明して下さい。
- (3)1章4節の「このいのちは人の光であった」との意味を説明して下さい。

【解 説】

(1) 《ことば》とはどなたを指しているのか

《初めにことばがあった》 この聖句の《ことば》とは、どなたを指しているのか。

ことば (ギリゴス／λόγος) とは

(思想・意志の表現としての言葉)

- ①言葉、語られた内容、発言(の内容)、談話、話、演説v; 弁舌、説明、ことわざ、評判; ὁ λόγος τοῦ θεοῦ, 神の言葉, 神が語られた言葉 (預言者などの使者を通して), 神から人に啓示された言葉; διὰ λόγου, 口で, 口頭で; ὁ λόγος (御言葉, 福音の使信, キリストの福音, ルカ1:2, 使14:25).
- ②ロゴス, ことば; 罪の中にある人々への神のメッセージそのもの, 罪人に対する神の意志と究極的意思表示, 神の愛と神が何をして下さったかを身をもって表わしておられる神の発言, 神の語りかけとしての**人格キリスト** (肉の形をとって人の世界に来られる以前の存在を含めて), ヨハ1:1, 14.
- ③計算, 勘定, 会計報告, 申し開き, 使20:24, I ペテ4:5
- ④理性, 理由, 根拠, I ペテ3:15; κατὰ λόγον(正当に, 道理にかなって, 当然のこととして, 使18:14.
- ⑤ (話)にのぼっていること, 内容, こと, ことがら, 話題, 問題, マタ21:24, 使15:6.

(c) 織田昭 電子版「新約聖書ギリシャ語小辞典」改訂第4版

《ことば》と訳されたギリシャ語ロゴスの意味は、上記のギリシャ語辞典より

- ・罪の中にある人々への神のメッセージそのもの、
- ・罪人に対する神の意志と究極的意思表示、
- ・神の愛と神が何をして下さったかを身をもって表しておられる神の発言、
- ・神の語りかけとしての**人格キリスト**

と説明されている。

私たちは自分の心の内にある感情・思想を他人に伝えるのに「ことば」がなければ伝えようがない。だから、「ことば」は、音声や文字などにより表され、自分の感情・思想を他人に伝えるための手段であると定義される。

同様に、神様が私たち人間に、神の御心を伝えるために「ことば」なるキリストがおらなければ明確に御心を伝えることができない。

神様は、私たち罪人に神様の御心・愛・救いを伝えるメッセージとしてキリストを、この世に遣わして下さいました。「ことば」なるキリストこそ、「神のメッセージ、神の意思表示、神の発言、神の語りかけ」と理解できる。

ヨハネはこの個所以外にも3個所で、キリストのことを、《ことば》(ヨハネ1:14) とか《いのちのことば》(I ヨハネ1:1) とか《神のことば》(黙示録19:13) と呼んでいる。

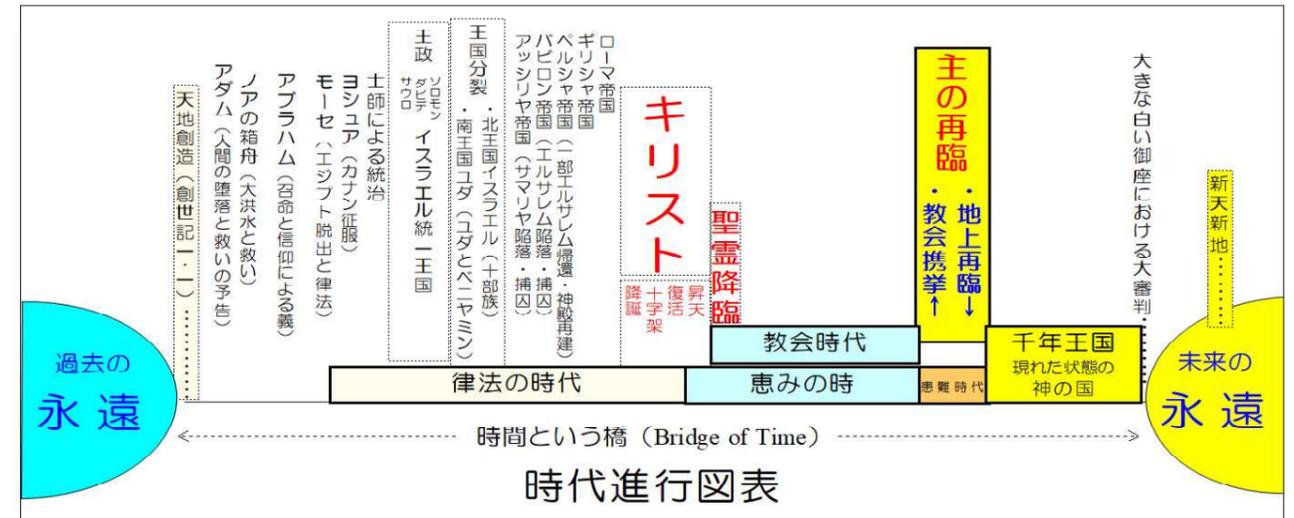
(2) 主イエス・キリストは永遠の昔から存在しておられた

《初めに ことばがあった》

《ことば》なるキリストは、天地創造の時に、その存在が始まったのではない。キリストは、《世界が始まる前に》(ヨハネ17:5) 御父と一緒に栄光を持っておられた。キリストは、あらゆる物質の創造の前に、また、時が始まる前に存在しておられた。彼は、《万物に先立って》(コロサイ1:17) 存在しておられた。彼は限りない永遠の昔から存在しておられたお方である。

この節は、キリストのご人格や神性に「始まり」があったわけではないことを教えている。キリストはベツレヘムの赤子として初めて存在するようになったのではない。ある人々が教えているように、復活後、何らかの方法で神のような存在になったのでもない。キリストは永遠の昔から神なのである。

ギリシャの神学者アリウス(250頃-336)は、キリストの人性を重んじ、キリストは神に造られた者でもあるから神格的でも永遠的でもない主張したため、異端として追放された。



(3) キリストは、「御父と区別されるが、御父とともにあって一体なるお方」である

聖書は、神は唯一であり、その神格は三つの位格(御父、御子、聖霊)から成り立っている、と教えている(マタイ28:19)。

《ことばは神とともにあった。ことばは神であった》

この節では、神格の二つの位格(ラテン語ペルソナ、人格の意)が示されている。すなわち、御父なる神、そして御子なる神(ことば)である。ヨハネ福音書は、イエス・キリストは神である、といろいろな個所で述べているが、これはその最初の例である。イエス・キリストが「神々のひとり」であるとか、「神に似た存在」とか、「神々しい」というのでは不十分である。聖書は、イエス・キリストは「神」である、と教えている。

御父と御子とは、二つの位格であるが、人間の理解を越えて一体性のうちに結びついている。《神とともに》の前置詞「ともに」はギリシャ語プロス(πρός)である。次頁のギリシャ語辞典の説明によれば、「(人格関係・交流・接触)〜と行き来して、〜と常に接触して、〜と密なる交わりの中に(一緒に)」という意味である。ただ「神とともにあった」と言うだけでなく、「神と向かい合っており」御父と御子は親密な交わりの中にあったということである。

父なる神が永遠から存在しておられたように、御子も同様に永遠から存在しておられた。共に等しい栄光を持ち、共に等しく永遠の御威光を持ち、しかも、その神性は1つである。これは偉大な神秘である。この真理を、あえて説明しようと試みることなく、幼子のように受けられることのできる者は幸いである。

前置詞 πρός (プロス) とは

(基本的意味：近くに、面して)

- I. [奪格(属格)と] ~の見地から有利な、~のためになる、(稀-1例) πρός τῆς ὑμετέρας σωτηρίας, 君たちの救いのために、使27:34.
- II. [位格と]
 - ①~のあたりに、の近くに(静止); πρός τῆ κεφαλῇ, 頭の所に, πρός τοῖς ποσίν, 足の所に, ヨハ20:12; πρός τῷ ὄρει, 山のあたりに, マル5:11. 山腹に.
 - ②~のあたりへ(近接運動) ἐγγίζοντες πρός τῆ καταβάσει, 下り坂の辺に近づいたとき, ルカ19:37.
- III. [対格と]
 - ①~に向かって、~(の方, 所)へ(運動); πρός Ἡρώδην, へロデの所へ, マタ2:12; πρός τοὺς πόδας αὐτοῦ, 彼の足もとに(ひれ伏した), マル7:25.
 - ②~の所に、~のあたりに(静止) πρός θύραν, 戸口の所に, マル11:4; πρός τὴν θάλασσαν, 海のそばで, マル4:1b.
 - ③~に対して(敵対・有効) πρός αὐτόν, 彼に対して(異議を), 使11:2; πρός τὸν θεόν, 神に対して(平和を), ロマ5:1.
 - ④(人格関係・交流・接触) ~と行き来して、~と常に接触して、~と密なる交わりの中に(一緒に) πρός ἡμᾶς, 我々と絶えず行き来(接触)して, マコ6:3; πρός αὐτόν, 彼と直接言葉を交わして, ガラ1:18; πρός τὸν θεόν, 神と向き合って, 神と密なる人格的交わりの中に, ヨハ1:1.
 - ⑤(関連・目標) ~にとって、~に関連して: τὰ πρός τὸν θεόν, 神に関わる事から(人と神の全関係)のために, ヘブ5:1; τὸ ἀγαθὸν πρός οἰκοδομήν, (霊的に)建てるのに役立つこと, ロマ15:2; ὠφέλιμος πρός διδασκαλίαν, 教えに有益で, IIテモ3:16.
 - ⑥(目的) ~するために、~する目的で[不定詞と] πρός τὸ θεαθῆναι αὐτοῖς, 彼らに見てもらう目的で, マタ6:1.

(c) 織田昭 電子版「新約聖書ギリシア語小辞典」改訂第4版

(4) 主イエス・キリストは「実に神ご自身」である

《ことばは神であった》

《ことばは神であった》の「神」には冠詞がついていないところから、エホバの証人では、キリストをエホバの神より劣る神の性質を備えていると主張する。これは、ギリシャ語の文法にあまり通じていない人々の議論である。彼らがエホバの神(ヤハウエ)と言っているところでも、冠詞のついていないところもあり、キリストが冠詞のついた神と呼ばれているところもある(ヨハネ20:28)。

それでは、冠詞の有無は何を意味するのか。冠詞付いている時は、その強調点は個別性にあり、人格としての神のを意味する。冠詞の付いていない時には、その強調点は性質にあり、神性を表す。

ことばなるキリストは、単なる創造された天使とか、父なる神より劣る存在であったが罪人を贖うために、父なる神から権能を授けられただけのもの、というでもない。キリストは、全き神ご自身である。彼の神性に関しては、御父と等しく、御父と同質の神であり、世界の存在以前におられたお方である。

(5) 主イエス・キリストは、「すべてのものの創造者」である

《すべてのものは、この方によって造られた。

造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった》

キリストは被造物ではなく、あらゆるものの創造主であられた。「すべてのもの」の中には、天体、植物、動物、人類、御使いなど、目に見えるもの、見えないものすべてが含まれる。

主イエスは、ある異端者たちが偽り主張しているような、神の被造物では決してない。その中にあるすべてのものの創造者である。この例外はあり得ない。造られたものがあれば、それはキリストがお造りになったものである。創造主であるキリストは、当然、お造りになったあらゆるものにまさったお方である。

神であられる三つの位格のすべてが、創造のみわざに参与された。「神が天と地を創造した」(創世記1:1)。「神の霊は水の上を動いていた」(同1:2)。「万物は、御子によって造られ、御子のために造られた」(コロサイ1:16)。

(6) 主イエス・キリストは「すべてのいのちと光の源泉」である

創造主である神は、単なる法則や原理のようなものではなく、生ける神であられる。だから、いのちを持っておられる。

聖書においては、死が神の呪いを表すのに対して、いのちは神の祝福を表す。神の祝福なしに、何1つとして本来の造られた目的にそったあり方をすることができないという意味で、人間の幸福は常にこの神の祝福にあるというのが、聖書の基本的な教えである。

《この方^{かた}にはいのち^{いのち}があった。このいのち^{いのち}は人の光^光であった》

ここで用いられている語「いのち」は、聖書が記している三種類のいのちをすべて総括するものである。それは、肉体的いのち、霊的いのち、永遠のいのちである。

私たちは、生まれた時に肉体的いのちを授かった。さらに、キリスト者として新生する時には、霊的ないのち、永遠のいのちを授かる。そのいずれもキリストから来る。

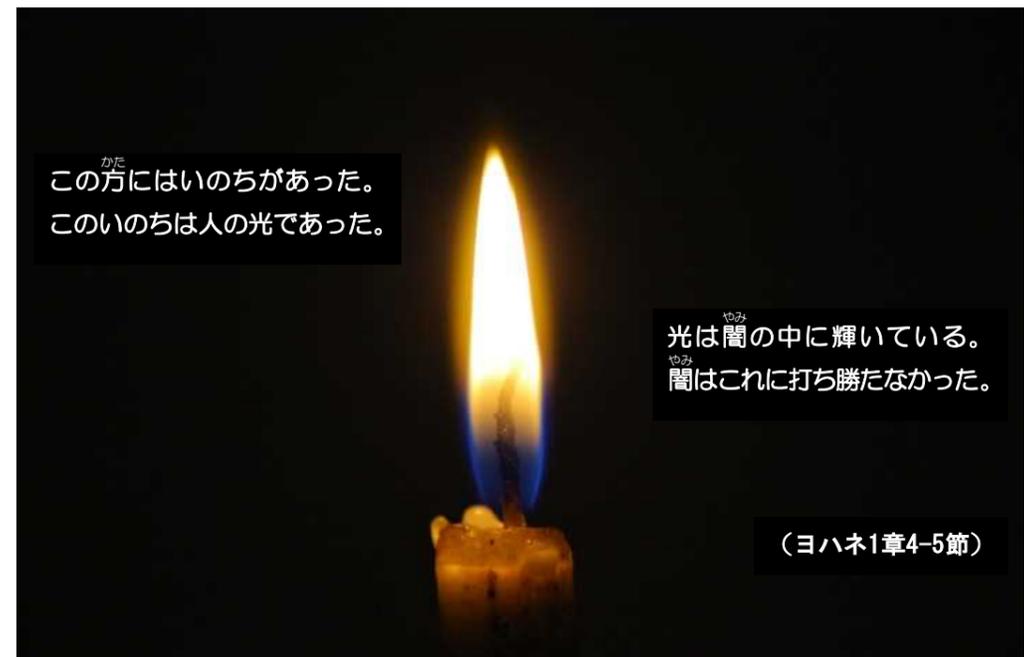
また、私たちに《いのち》を与えて下さったお方は、《人の光》でもあられる。このお方は、人に必要な導きと指示(人生の真の目的を知り、神の国への道)を与えて下さる。

(7) やみはこれに打ち勝たなかった

《光は闇^{やみ}の中に輝^{やみ}いている。闇はこれに打ち勝たなかった》

人類に、罪が入って来たことによって、人の心は暗くなった。罪によって世界は暗闇^{くらやみ}の中にあり、一般的に言って、人は神を知ることもなければ、知りたいと願うこともなくなった。この暗闇^{くらやみ}の中に、主イエスは、暗き場所に輝く「光」として来られた。

いつの時代も、人類の圧倒的多数の者は、キリストを知ることを拒んできた。墮落と救い主の必要を忘れてきた。しかし、光は、絶えず「闇の中に」輝き続けてきた。人間の拒絶や敵意も、真の「光」が輝く妨げにはならなかった。



【問】 本日の学びの最後に

キリスト者の信仰は「聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによる」(ロマ10:17)。しかし、悪魔サタンは、みことばの真理から逸らそうと今も働き続けております。

今日、ものみの塔協会(エホバの証人)と呼ばれる団体では、三位一体を否定し、御子キリストは被造物であり、人となる前は御使いミカエルであると教えています。これは大変な異端であると言わねばなりません。聖書の真理を曲解するものです。彼らが曲解して教える根拠になっているコロサイ1章15節を考えてみましょう。

コロサイ1:15 「御子は、見えない神のかたちであり、すべての造られたものより先に生まれた方です。」

【解説】 詳しい説明は、教会のホームページをご覧ください。(コロサイ15節の標 http://fukuint.holy.jp/korosai115.pdf)